

# 木精

森鷗外

青空文庫



巖いわが屏風びょうぶのように立っている。登山をする人が、始めて深みやま山薄雪草うすゆきそうの白い花を見付けて喜ぶのは、ここの谷間である。フランツはいつもここへ来てハルロオと呼ぶ。

麻のようなブロンドな頭を振り立って、どうかしたら羅馬法皇ロオマの宮廷へでも生捕いけどられて行きそうな高音でハルロオと呼ぶのである。

呼んでしまっ**て**じい**つ**として待**っ**ている。

暫しばらくすると、大きい鈍いコントロールバスのような声でハルロオと答える。

これが木精こだまである。

フランツはなんにも知らない。ただ暖かい野の朝、雲雀ひばりが飛び立って鳴くように、冷たい草叢くさむらの夕ゆうべこおろぎが忍びやかに鳴く様に、ここへ来てハルロオと呼ぶのである。しかし木精の答えてくれるのが嬉しいうれい。木精に答えて貰もらうために呼ぶのではない。呼べば答えるのが当り前である。日の明るく照っている処に立っていけば、影が地に落ちる。地に影を落すために立っているのではない。立っていけば影が差すのが当り前である。そしてその当り前の事が嬉しいのである。

フランツは父が麓ふもとの町から始めて小さい沓くつを買って来て穿はかせてくれた時から、ここへ来てハルロオと呼ぶ。呼べばいつでも木精の答えないことはない。

フランツは段々大きくなった。そして父の手伝をさせられるようになった。それで久しい間例の岩の前へ来ずにいた。

ある日の朝である。山を一面に包んでいた雪が、いただき巔にだけ残つて方々のもみ樅の木立が緑の色を現して、深い深い谷川の底を、水がごうごうと鳴つて流れる頃の事である。フランツはひさしぶり久振で例の岩の前に来た。

そして例のようにハルロオと呼んだ。

麻のようなブロンドな頭を振り立つて呼んだ。しかし声は少しさび荒を帯びた次高音になっているのである。

呼んでしまつて、じいつとして待つている。

暫くしてもう木精が答える頃だなど思うのに、山はひっそりし

てなんにも聞えない。ただ深い深い谷川がごうごうと鳴っているばかりである。

フランツは久しく木精と問答をしなかつたので、自分が時間の感じを誤っているかと思つて、また暫くじいつとして待つていた。

木精はやはり答えない。

フランツはじいつとしていつまでも待つている。

木精はいつまでもいつまでも答えない。

これまでいつつも答えた木精が、どうしても答えないはずはない。もしや木精は答えたのを、自分がどうかして聞かなかつたのではないかと思つた。

フランツは前より大きい声をしてハルロオと呼んだ。

そしてまたじいっとして待っている。

もう答えるはずだと思ふ時間が立つ。

山はひっそりしていて、ごうごうという谷川の音がするばかりである。

また前に待った程の時間が立つ。

聞こえるものは谷川の音ばかりである。

これまではフランツはただ不思議だ不思議だと思つていたばかりであつたが、この時になつて急に何とも言えない程心細く寂しくなつた。譬<sup>たと</sup>えばこれまで自由に動かすことの出来た手足が、ふいと動かなくなつたような感じである。麻痺<sup>まひ</sup>の感じである。麻痺<sup>まひ</sup>は一部分の死である。死の息が始めてフランツの項<sup>うなじ</sup>に触れたので

ある。フランツは麻のようなブロンドな髪が一本一本逆に豎つような心持がして、何を見るときもなしに、身の周匝まわりを見廻した。目に触れる程のものに、何の変った事もない。目の前には例の岩が屏風のように立っている。日の光がところどころ霧の幕を穿うがつて、縦の木立を現わしている。風の少しもない日の癖で、霧が忽たちまち細い雨になって、今まで見えていた縦の木立がまた隠れる。谷川の音の太い鈍い調子を破つて、どこかで清い鈴の音がする。牝牛めうしの頸くびに懸けてある鈴であろう。

フランツは雨に濡れるのも知らずに、じいっと考えている。余り不思議なので、夢ではないかとも思つて見た。しかしどうも夢ではなさそうである。



暫くしてフランツは何か思い付いたというような風で、「木精は死んだのだ」とつぶやいた。そしてぼんやり自分の住んでいる村の方へ引き返した。

同じ日の夕方であった。フランツはどうも木精の事が気に掛かってならないので、また例の岩の処へ出掛けた。

この日丁度午ひるすぎ過ごくから極軽い風が吹いて、高い処にも低い処にもまろ団がっていた雲が少しずつ動き出した。そして銀色に光る山の巔が一つ見え二つ見えて来た。フランツが二度目に出掛けた頃には、巔という巔が、藍あいろ色いろに晴れ渡った空にはつきりと画かされていた。そして断崖だんがいになつて、山の骨のむき出されているあたりは、紫を帯びた紅くれないにおに勻うのである。

フランツが例の岩の処に近づくと、忽ち木精の声が賑やかに聞えた。小さい時から聞き馴れた、大きい、鈍い、コントロールバスのような木精の声である。

フランツは「おや、木精だ」と、覚えず耳を<sup>そばだ</sup>敬てた。

そして何を考える隙もなく<sup>ひま</sup>駈け出した。例の岩の処に子供の集まっているのが見える。子供は七人である。皆ブリユネットな髪をしている。血色の好い丈夫そうな子供である。

フランツはついに見たことのない子供の群れを見て、気兼をして立ち留まった。

子供達は皆じいっとして木精を聞いていたのであるが、木精の声が止んでしまうと、また声を揃えてハル口才と呼んだ。

勇ましい、底力のある声である。

暫くすると木精が答えた。大きい大きい声である。山々に響き谷々に響く。

空に聳そびえている山々の巔は、この時あざやかな紅に染まる。そしてあちこちにある樅の木立は次第に濃くなる。鼠ねずみいろ色ひたに漬ひたされて行く。

七人の知らぬ子供達は皆じいっとして、木精の尻しりごえ声こゑが微かになつて消えてしまふまで聞いている。どの子の顔にも喜びの色が輝いている。その色は生の色である。

群れを離れてやはりじいっとして聞いているフ란ツが顔にも喜びひらめが閃ひらめいた。それは木精の死なないことを知ったからである。

フランツは何と思つてか、そのまま踵きびすを旋めぐるらして、自分の住んでいる村の方へ歸つた。

歩きながらフランツはこんな事を考えた。あの子供達はどこから来たのだろうか。麓の方に新しい村が出来て、遠い国から海を渡つて来た人達がそこに住んでいるということだ。あれはおおかたその村の子供達だろう。あれが呼ぶハルロオには木精が答える。自分のハルロオに答えないので、木精が死んだかと思つたのは、間違であつた。木精は死なない。しかしもう自分は呼ぶことは廃よそう。こん度呼んで見たら、答えるかも知れないが、もう廃よそう。闇やみが次第に低い処から高い処へ昇つて行つて、山々の巔は最後の光を見せて、とうとう闇に包まれてしまった。村の家にちらほ

ら燈火が付き始めた。

(明治四十三年一月)



# 青空文庫情報

底本：「普請中 青年 森鷗外全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年7月24日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版森鷗外全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～9月刊

入力：鈴木修一

校正：mayu

2001年7月31日公開

2006年4月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 木精 森鷗外

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>